

京繡

【産地組合】京都刺繡協同組合

（産地紹介）

京繡は、平安京が造られた時、刺繡をするための職人をおかかえる織部司(おりべのつかさ)という部門が置かれたのが始まりとされています。江戸時代中期に、宮崎友禅齋が友禅染めを完成させるまで、刺繡は、鹿の子絞、摺(す)り箔とともに布地を加飾するための重要な方法でした。特に、経済力を持つようになった町人たちによって作り出された、「寛文文様」と呼ばれる新しいデザインの表現の中で、



刺繡は重要な役割を果たしました。奈良県の興福院に伝わる掛袱紗(かけふさ)は、格調高い江戸中期の作品を代表するものと言えます。

絹織物、麻織物に絹糸、金銀糸等を用い、伝統の高度な技法を用いて刺繡し、華麗で雅やかな平安の香りを伝えています。